

ハイスクールD×D 神へ 到りし転生者

ムリエル・オルタ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神様の仕事のやり忘れて死んだ青年は新たな宇宙の根源となり、自身の死亡フラグを
排除、原作介入を行う。

作者の妄想が炸裂した結果です。完全自己満足なので嫌な方はブラウザバックを推
奨します。

一応原作はアニメで見てているのですが殆ど忘れかけているので、ハーメルン知識が大
部分を占めています。

多重クロスオーバーです。ただ、アニメキャラがキャラ崩壊して出てきたりします。
シリアルはブレイクしてついでにシリアルもブレイクします。

タグに書けなかつたので此所に追記
超ご都合主義

目 次

原作前（ダイジエスト）	11	転生	1
原作介入という名の一方的な攻撃	5	原作前（ダイジエスト）	42
神様だから好きなことをする。好きなよう	16	原作介入とい	やせいのライザーがあらわれた！オリ主
うにする	21	は威圧した！	は威圧した！
原作直前力オス眷属（違う）の愉快な日常	28	レー	テインングゲーム観戦
原作介入 教師はままならない（教師要	34	テ	50
素殆ど無し）	28	イ	55
原作介入 墮天使は馬鹿しか居ないのだ	21	ン	42
ろうか	11	ゲ	42

慢心は家の姫の特権である。まあ、最近
してない気がするけどね…… 42

やせいのライザーがあらわれた！オリ主
は威圧した！ 50

レー

テインングゲーム観戦

55

42

転生

「突然ですが、貴方は死にました」

「ア、ハイ」

「原因は私ですが」

「テンプレ乙」

気が付いたら360度真っ白な空間に居た。転生ですね。分かります（棒）
目の前にはアルビノ系美女が居るけど、多分コレが神様だろう。
「多分ではありません。正真正銘神様です」

「そーかい。爽快」

「真面目に聞いてくださいよお～」

神様涙目乙。

暫くして神様の涙も引つ込み、話し始めた。

「実は30年前に起爆予定だつた不発弾を私が起爆するのを忘れていてですね、そこに
家が建つて誰もその不発弾に気付かずそのまま16年。貴方が庭に鉢を植えようとス
コップで土を掘ろうとして不発弾にぶつかり、その衝撃で不発弾が起爆。結果貴方が死

「なんだのです」

「つまり？」

「私の不注意で貴方を殺してしまいましたごめんなさい」

そう言つて神様は私に向かつて頭を下げた。見事な90度。綺麗な礼だ。小説だったらもう少しアホっぽい理由だけど今回は割とマジな奴だつた。テンプレのトラックとか車にはねられるんじや無くて不発弾による爆死か。

「そうですか。じゃあ、復活は可能ですか？」

「申し訳ありません。爆発したのが壱ノ爆弾でして、貴方の体は木つ端微塵。五体四散してしまいました」

え?!私の死に方酷すぎ!?

てことはこのまま輪廻の輪に戻つて行くのか……。

「あ、流石に私に非がありますので貴方はこのまま転生して貰いますよ?」

「マジですかい?」

「マジです。大マジです」

神様は凄い真顔で頷いた。真顔でも可愛い。

「可愛いだなんて…………ハツ!そんな事をしている場合じやありません!この紙に四つ程欲しい能力を書いて下さい」

そう言つて神様は私に向かつて紙とペンを差し出した。能力が要るような世界なのかな?」

「はい。貴方が転生する予定の世界は極度のパワーインフレが激しい世界です。その為その世界に転生する際はすぐに死なないように能力を授けるのです」

「へ~」

パワーアインフレが激しいつてまるでハイスクールD×Dみたいだな。 そういえば、アレアニメしか見てなかつたな。本も買いたかつた。

「おお! 正解です! 今から貴方が転生するのはハイスクールD×Dの世界です!」

「うつそおおおお」

コレは死んだ。原作開始よりかなり前にして私の死亡フラグになり得るモノを全て排除しないと確実に死ぬ。どうする? そんな能力なんて書いたら私は確実に神様行きだぞ?

「別に大丈夫ですよ? 過去にも世界を作るところから始めたいつて言つた人居るらしいです。ただ、その世界の管理を貴方がするだけですよ?」

居たんだそんな人。 どうか、なら大体私の欲しい能力は決まつたな。

・世界の始まり混沌カオスになる。

・様々なアニメ、ゲームの能力やアイテムが使えるようになる。

・世界に味方として他のアニメやゲームのキャラを出す。

・絶対に死なない体。世界最高峰の頭脳。

・出来れば平穏に暮らしたい。

最後に聞しては最早願望。あの世界に行くのだから平穏なんて無いに等しいと思うけどそれでも少しは平穏が欲しい。

「…………まあ、良いですよ」

「いいの!?」

自分でもかなりのチートだと思つていたんだが…。まあ、神様が良いと言つているのだからいいのだろう。

「じゃあ、この能力で転生させて下さい」

「分かりました。それでは、転生する年代はどうしますか?」

神様がそう聞いてきた。愚問だ。そんなの決まつていてる。

「宇宙が生まれる前で!」

「分かりました。それでは新たな人生に幸多きことを」

神様のその言葉と同時に私の視界は真っ白に染まつた。

原作前（ダイジエスト）

あの後私は何も無い空間に居た。世界の根源である混沌カオスにならせてもらつた御陰か、この場所が宇宙の出来る前だということが理解できた。

「ここで一旦能力に慣れておかなくちゃね」

私はそう呟くと何も無い空間から一本の剣を出した。その剣は黒く、そして重厚感がある剣だった。名を『エリュシデータ』、どつかの黒の剣士が使つていた剣だ。それを振る。ちょうど良い重さ、手前に重心がくるので使いやすい。

「これは問題なく能力は使えるって事で良いのかな？いや、もう少し他也試そう」

エリュシデータを粒子にして消して新たに剣を作り出す。刀身は白銀で鍔は半月型の金色。何処か神々しさすら感じさせる剣。これは腹ペコ騎士王の剣だ。

「おゝ。やっぱりFateでお馴染みなのは暴食騎士王の剣だな」

なんとなく宝具を解放したくなつたが何が起こるか分からないのでとりあえず保留。⋮さつきから『なんとなく』とか『とりあえず』を多用している気がする。まあ、いつ

か。

「さて、実験を続けよう」

（転生から何億年後）

「それじゃガイア後は頼んだよ。私は少し眠るから」

「分かりました我らが父よ。地球やその他の生命の管理は私にお任せ下さい」

私は最初の数億年間自分の能力の制御などに時間を割いた。当初私は能力は神に貰つたアニメ、ゲームの能力や武器が使える能力だけだと思っていたが、他にも混沌カオスとなつたことで色々な能力が追加されていた。

ついでに途中で宇宙が生まれました。原因をダイジェストで説明しよう。

手頃なサイズな球を生成。

←

ビリヤード開始

←

一球だけ思いつ切り突いた所為で他の球にぶつかつた際爆発が起こりそれがビック
バンに（作つた球が惑星規模だつた。そして私が自身の大きさに気づかなかつた結果）

←

宇宙初の銀河系発生。

←

7 原作前（ダイジェスト）

気にせずビリヤード再開。

力加減を間違えて何度も銀河系を生成。（数えるのも億劫になるレベルで増えた）

ビリヤードを一時中断。話し相手を作ろうとする。

ガイア誕生。

二人でキャッチボールを開始。

私が勢い余り太陽系にあつた小惑星群に球（惑星）をぶつける。

どういう原理か地球＆月その他惑星誕生。

そのまま暫くキャッチボール。

今度はガイアが見当違いな方向に球（小惑星）を投げる。

←
地球に衝突。
氷河期に。

二人とも地球観察だけにとどめる。（つまり運動しない）

人類が誕生。

流石に眠いので管理をガイアに任せて睡眠↑今ココ。
さて、私も少し眠いしちよつと眠ろう。

「で？どうして私が寝ている内にこんな事が起こっているのかな？」

「すみません」

目の前で土下座するゼウス。此奴、いつの間に生まれてた。ゼウスは私に寝ている間に何が起こったのか説明しだした。

どうやらギリシャ神話通りになつてしまつたらしい。違うのは人々の信仰によつて各地で神が生まれていること。そして、ゼウスが面白半分で天使や悪魔、堕天使などを創つたこと。

原作にそんな描写あつたけ？まあ、いいか。この世界はイレギュラー。私という存在が世界の根源となつてるのでここから先どうなるか分からぬ。

未来は神のみぞ知る…………あ、私が神か。

今はゼウスが創つた天使、悪魔、堕天使が戦争をしている。

……

……

……

……

「ああ！？もう原作始まつてる！？私はいつたいどれ程眠つていたんだ！」

「ガイア、私は一体どれ程眠つっていた！」

「…そうですね、ざつと5000年程でしようか？」

予想より結構寝たな。まあ、宇宙を創る前に能力の馴らしはしておいたから問題は無い。

私は姿を変える。世界の根源たる混沌^{カオス}に姿は無いのだ。

さあ、楽しい楽しい原作介入の始まりだ。

原作介入という名の一方的な攻撃

目下では三すくみで戦いが起ころっている。

「確か、天使がミカエル。墮天使がアザゼル、悪魔は四大魔王だつけ？」

いかんせん長い間色々事をして遊んだりしていたので原作知識があやふやだ。まあ、大筋だけ覚えておけば良いか。

それにしても戦力が拮抗してるなー。

かつて前世で起こった第二次世界大戦の様に総力戦なのか？

全ては私を始まりにしているからなーどの種族のひ孫達？に肩入れしても他から不満でそうだし：。そもそもなんで戦争しているんだ？領土か？領土なのか？しかしだ、天使が侵略とはいががなものか。それとも正当防衛とでもいうつもりなのかな？

……

……

：

あ、二天龍ってきた。よっしゃ行つてこよう！

え？なんでそれまで介入しなかつたかつて？理由は単純明快、それでは面白くないか

らさ！

『同感だ、白いの。戦いは鳥共を消した後だ』

「――という訳にはいきません――。折角の運動会を邪魔されたら保護者の私のメンツがつぶれるんです――」

何処か気の抜けそうなしゃべり方でそれは舞い降りた。背中から生えた羽は三種族のどれにも似ていな。その羽は白く光り、何処か神々しい。まあ、アニメのエヴァに出てきた第15使徒アラエルの羽なんだよ。可視光エネルギーによる精神攻撃はやらない。だつてやつたら一瞬だから。

そして私の姿なのだが、ブラツクブレットの蛭子影胤ひるこかけたねを想像してくれると分かりやすいだろう。あの見た目で、髪黒く長い。ホーステールで束ねてある。服装はコレは怪盗キッドのカラーを思い出してくれれば分かりやすい。

『何者だ！』

「何者と言われてもねえ…。私は善良な神の一柱とでも言つておきます」

大げさなリアクションを取りながら二天龍に答える。すると私のその行動が気に入らなかつたのか、何も言わずに襲いかかってきた。

「はあ…………龍とて所詮は獸か…。この前会つた娘達に会いたい…」

そう言いながら二匹の攻撃を紙一重に避ける。すると二匹は振り返り際にブレスを吐いてきた。そのブレスに私はなすすべなく呑まれる。

二〇〇〇年

地上から息を呑む声が聞こえた気がする。まあ、この程度で死ぬ事は無いけどね。
私は今回初めて使う。左手を突き出した。

「喰らえ」

私のその言葉と同時に左腕が膨張し、手首から先が獣の顔になり、二天竜を襲つた。 獣の頭は最初に赤龍帝を襲つた。

「チイツ！なんなのだ！」

Boost! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!

赤龍帝はなんとか躲し、能力を使つたブレスを放つた。

赤龍帝は自分の力を信頼していた。この力の御陰でコレまで白龍皇と戦っていたのだから。しかし、そんな赤龍帝の信頼もこの獣の前では無意味だった。その獣には炎は効かず獣はそのまま赤龍帝に齧り付いた。

白龍皇は驚き、一瞬だけ私から注意を逸らしてしまった。それがまた致命的な隙を生

んでしまった。

「ヤアヤアヤアー!」

「王の財宝！」
左手を獣のままにして私は白龍皇の周囲に金色の波紋を出現させた。

『う…ぐう…。赤いのは死んだか』

「まあね。美味しかったよ、心臓を■■にしたから君の心臓を■■にしてやるから永遠に戦える。だから、君の体も頂くよ」

「…………ああ、分かつた」

私と白龍皇の会話を三種族は黙つて見ていた。そんな中、私は赤龍帝を全て飲み込んだ。そして暫く左腕の獣は租借していたが暫くすると左腕の獣は口からペツと口から籠手のような物が出てきた。それは数秒間だけ存在していると、その後光の粒子となつて消えていった。

『俺もああなるのか』

15 原作介入という名の一方的な攻撃

「そうだね、君の心臓を結晶化させてそれが適切な武装に変換されるんだ」

そう言うと白龍皇は納得したように目を閉じた。私はそれを了承と受け取り左手の獣で喰らつた。暫く獣は租借していたが赤龍帝の時と同じく武器？が出てきた。何故？が付いたかというと出てきたのは羽だつたからだ。それも暫く出現してたが暫くして籠手と同じく粒子となつて何処かへ消えた。

私はそれを見送ると振り返る。そこには先ほどをまでの出来事を呆然と見ていた三種族だった。

私は大仰な身振り手振りで挨拶をする。この格好の時はなんとなくこんな感じがしつくりくると思うんだ。

「やあやあ初めまして。私のひ孫諸君。私の名はカオス。混沌を司る者であり、この世界の根源。全ての生命の父であり、母だ！」

神様だから好きなことをする。好きなようにする

あの場でノリで自身の正体を明かしたのは不味かつたろうか？いや、こつちの方が面白いのだ。私は刹那主義者。長い時間生きる者は大体最終的にはこうなるだろう。そんな訳で私はコレまでの歴史の中で誰もなしえなかつたであろう事をやろうと思う。

それは……………。

「さて、サーベクス・グレモリー。いや、サーベクス・ルシファーと言つた方が良いか？」
「サーベクスで良いですよ、カオス様」

神と悪魔の会談。まあ、中身は私の楽しみの為に下準備をするための交渉の場だ。
「さて、私が魔王である君に用意して貰いたいのは地位だ」

「…つまり爵位がお望みで？」

うん。流石超越者。頭の回転が速い。先生は頭の良い子は好きです。私としても彼の現状をある程度把握している。そして既に知つている。

現在の魔王は前四大魔王が戦死した事によつて起きた悪魔社会を支えるための支えになつてゐる。若手悪魔は殆どが先の戦争で戦死。名だたる将も殆どが戦死してゐる。質より量で圧倒する先方の得意な悪魔だがそれを指揮する者が居なければただの鳥合

の衆でしか無い。それに現在の悪魔はそんな鳥合の衆すら集めることができない。

「ああ。大丈夫だ、心配しなくても対価は用意してある。…………コレだ」

そう言つて私はザーゼクスと対面している机の上に4組のチエスの駒を置いた。

「コレは？」

「コレは変異の駒。^{ミューテーション・ピース} 天使だろうが堕天使だろうが人間、その他種族を悪魔に転生させることが出来るアイテムだ」

「!？」

私の言葉にザーゼクスは驚き、先ほどまでの表情が崩れた。フフツ、動搖しているな。
「…………何故そのような物を私に見せるのですか？」

「分からぬいか？コレが対価だよ。まあ、コレは私から君たち新四大魔王へのプレゼン
トだがね。本題はここからだ。君たちも一方的にコレを受け取ることは無いだろう？
それにこの駒は私ですら創るのは大変だ。コレを各貴族や若手悪魔に配ろうとすれば
私が過労死するだろう？そこで、だ。君たちにはこの駒の劣化量産版、悪魔の駒を作つ
て貰いたい」

所々嘘を織り交ぜる。特に過労死とか量産性が悪いとか。そしてザーゼクスへの牽
制のために先に「あげるにはあげるけどただ貰うだけじゃ駄目だよね？」と釘を刺すの
も忘れない。

「爵位はどれ程をお望みなのですか……？」

「公爵……と、言いたいが流石にそれは駄目だろうからね。その下の侯爵、又は辺境伯でいい」

私の言葉にサー・ゼクス一瞬鳩が豆鉄砲を食らつたかのような顔をする。が、一瞬での表情を消した。流石だな。良い魔王になろうだろう。

私はそのまま立ち上がりその場を立ち去ろうとする。それをサー・ゼクスが止める。

「待つて下さい。仮に悪魔の貴族になつたとしてなんと名乗るおつもりですか？」

「ああ、そんな事か。…………そうだな。なら、こう名乗ろう。ローズ・ベリアル。炎の薔薇とね」

私はそう言つてその場から消えた。結果は知つてゐるから。

さて、次は天界だ。墮天使は知らん。個人的にあそこは行きたくない。

「さて、聖書の神ヤハウエ。君の大叔父：いや、全ての生命の父であるカオスだ。この前は驚かせて済まなかつたね」

「い、いえ！そのような事は！」

ヤハウエは緊張しているのか目が左右に揺れている。まあ、気持ちは分からなくも無いが。まあ、後ろにいるミカエルとガブリエルなんて石化してるけど。そんな呪いはかけた覚えは無いよ？

「今回天界に来たのは君たち天使に関わることだ」

「「?」「!」」

私の言葉にヤハウエを含む三人が息を呑んだ。まあ、そうだろう。悪魔ほどでは無いが天使も少なからず被害を受けている。しかし悪魔と比べればというだけであつて天使全体から見てみると深刻な数だ。なんせ天使は墮天する可能性が有るからだ。その為、迂闊に種族の繁栄も出来ない。三種族の中で最も危機的状況にある種族だ。

「君たちは元々数が少ない。にもかかわらず今回の戦争でその数をまた減らした。私は懸念しているのだよ。天使の滅亡を、天界の崩壊を」

実際そうだ。神に救いを見いだした者達の受け皿になつてているのが教会勢力、つまり天界。それが滅亡すれば神に救いを求めた者達が報われない。

「そこで、だ。私は直々に加護を与えるよう。とびつきりの、盛大に、大盤振る舞いに、我が世の春を謳歌したまえ。加護は墮天防止。さあ、種を繁栄させよ。それが世界の総意になる。迷える我が子等の救いになる」

「はっ」

なんかヤハウエとミカエルが軍人みたいな返事をしているな。ガブリエルは上の空だ。まあ、いいか。私は天界に住む天使。世界に散らばった天使に墮天防止の加護を一人一人、産んだ子にまで引き継がれるようにかける。これで憂いは断つた。後は原作に

介入するだけだ。

さあ、始めよう。私の、私たちの永遠に続く演劇を。

原作直前力オス眷属（違う）の愉快な日常

「あ～暖かい日なた。おいしいお団子。もう最高ですね……ゴフツ」

「あ、おーい、マスター。沖田が吐血したぞー」

「え!! 今の会話の何処に儂が沖田をいじめた事になるのじゃ!! 完全にとばつちりだよネ
はあー。ノツブ沖田いじめちゃ駄目だろ? この前も言つたぞ?」

12

バーサーカーのノツブを適当にいじりつつ目の前の者を調理する。下半身は異形、上

半身は女。一部の馬鹿によつて生み出されてしまつたはぐれ悪魔。

「サンが要りません、
ありがとうございます」

さて、おわかりだろうか。私は現在Fateのサーヴァントに囲まれている。まあ、私の食事風景を見ても問題ない奴だけだが。他にもいるので紹介しよう。

朝は最近起きてこなくなつたアーチャーのギルガメッシュ（女）まあ、姫ギルだ。そしてよく家の中で息絶えている事が多いランサーのクー・フーリン。家に居ると何かと世話を焼こうとするキヤスターの玉藻の前。忠誠度が臨界突破してからは手に付けられない状態のライダーの牛若丸。今私の間違いを正したのがアサシンの静謐のハサン。最近見ないが多分書庫に籠つているルーラーのホームズ。ツンデレだと思つてたけどただのデレデレなアヴエンジャーのジャンヌ・ダルク。昔前世で見た時とキヤラ崩壊が激しいアルターエゴの痴女の殺生院キアラ。巫山戯てBBAと言うと殺しにかかるくるムーンキヤンサーのBB。私の家で殆ど唯一の女性常識人枠のシールダーのマシュ・キリエライト。他にも仲間はいるが常識人は少ない。そして殆どがキヤラが崩壊している。

まあ、主人的な立場にいるのが私なのだからしようがないかもしねないが。

「ふう。ごちそうさま。いや、日本神話勢様々だね。毎日肉に簡単にありつけるのは私としてもとても喜ばしいことだし」

此所は日本の駒王町。近くに龍脈があるためはぐれ悪魔が出没する地。この地は私が日本神話勢力から貰い受けた土地の一つだ。まあ、日本神話勢の殆どは宴会好きで仕事をしないことが多い。その為、日本全体を私が守護していると言つて過言では無い。しかし、私も万能では無い。瞬間移動は出来るが、同時に来られたら対処も出来ない。

そのことで私は対策を取らせて貰つた。それは人間以外の種族が日本に転移などをしてきた際、問答無用で駒王町に強制転移させる結界の設置だ。

御陰で私は喰うに困つていらない。その原因も私なのだが。

ここで『東京喰種』を知つてゐるだろうか。私は昔アレの甲赫を調子に乗つて出したり戻したりして遊んでいたら体内にRc細胞、つまり赫子が出来ていた。神である私も流石に自分の体内的細胞を変質させる能力は無い。結果、定期的に人肉を食べないといけなくなつたのだ。まあ、悪魔で代用しているけどね。

長つたらしく考えていると念話が来た。

『どうしたエミヤ。今日は朝からお菓子のレパートリーを増やすと意気込んでいたがまさかもう諦めたのか?』

『そう言う訳では無いのだが…』

此奴は一人目のアーチャー。まあ、詐欺アーチャーだが。此奴は料理が得意だ。私もエミヤ程では無いが出来る。

念話越しのエミヤは何か言い淀むようにしていたがついに話を切り出した。

『猫一人にお菓子が食い尽くされてしまつてな。出来れば帰りにお菓子の材料と今日の夕ご飯の材料を買ってきてくれないか?』

『そんな事か…。任せろ、家の姫様を怒らせないような料理にしないとな。下手すると

「また家が壊れる」

『アレはマスターが悪いだろう。女性にGを投げるなど』

『いやー。ギルだつたら良いかなーと思つてね』

本当にあのときは死ぬかと思つた。室内でいきなり宝具解放するんだもん。Gに対して対界宝具使うつてどうよ…。

私は過去にしてかしたことを感じながら今いる場所から一番近いスーパーに仲間を引き連れ向かつた。

.....

.....

.....

.....

私が馬鹿だつた。あんな事になるとは思わなかつた。なんだよ、スーパーで会計金額二十万円ちよいつて。今度から沖田とノップは買い物に行かせない。ギルの黄金率とか私の能力とか悪魔貴族としての月のお金とか、まあ、色々あるがそれをたやすく凌駕する勢いで食費で金が飛ぶ。それはもう、亜光速並に。

「白音、黒歌、お前達は何時になつたら自重を覚えるんだ！」

「すみません」

「ごめんなさいにや」

現在はエミヤのお菓子を一瞬で食い尽くした白音と黒歌を説教していた。まあ、私も甘い物がなくなると駄目になるから仕方が無いけどね。

「食べるなら私も誘え！」一人が甘い物を食べている間私は悪魔しか食べれなかつたんだぞ！」

「食べるにや」「食べてますね」

「仕方が無い。生きるためだもの」

結局説教も最後はぐだぐだになる。はあ、もう良いわ。かいさーん。そーせんきよ

（キリツ）

「兄様全然面白くありません」

「ア、ハイ

だ。
二人は悪魔に捕まえられる前に原作介入し、引き取った。今では私たちの立派な家族

「おーい。カオスー、邪魔するぞー」

「邪魔するなら帰れ。コレでも食らえ、ブームランサー」

玄関の方から嫌な声が聞こえたので近くで死んでいたランサーの足を掴み投げた。

「この人でなし~~×~~
..」

毎回恒例のやりとり。今日もまた家に来たアザゼルをランサーで倒した。ランサー、君の犠牲は無駄にはしない！

そんな事をしていると二階から一人、目にもとまらない（常人基準）速さで来る人影が見えた。

一おかあさんお帰り

「ただいまジヤック。 ただ、 私は意識は男だからおとうさんにしてくれると嬉しいんだが」

「おかあさんは、おかあさんだよ?」

あ
う
ん

「いつて～～～。
毎回毎回なんで俺はこんな手荒な歓迎を受けなきや駄目なんだ？ 力才
ス？」

「ノリだ。
気にするな」

「気にするわ！」

そんなアザゼルを放置して私はカレンダーを見る。今日は日曜日。明日は月曜日。

仕事だ。後ろでは未だ騒がしく、多分いい加減ギルの堪忍袋の（無い）緒が切れるだろう。それが今の私の日常。楽しくはある。それをもつと面白くするため、明日から原作介入を本格的に行おう。

原作介入 教師はままならない（教師要素殆ど無し）

「ほお……。貴様等はまた同じ事をして私の手を煩わせたいのか」

私の目の前には三人の変態^{馬鹿}が居る。言わずもがな此奴らは駒王学園の（悪い意味で）有名な変態共だ。そのうちの一人、兵藤一誠がこの世界の本来の主人公。何故『本来の』を付けたかというとこの世界は既に私の手によつて様々な部分が変更されている。その為、『本来の』が兵藤一誠に付く。

「目の前に楽園があるんです！」

「先生、だつて男でしよう!？」

「俺たちの気持ちは分かるはずです！」

口々にどうでも良いことを言う三人。それをひとしきり聞いた後私は右手に持つていた出席簿^{聖劍}で三人の変態の頭を叩く。その際、素晴らしい音が三人の頭から聞こえたが、スルーした。

「はあ……。今日中に反省文を50枚提出しろ。そしたら帰つて良し」

「「はい……」」

意氣消沈している三人を背に私は職員室に戻つた。今の私の名は『神宮寺帝《じんぐ

うじみかど』』と言う。一応、100年続く名門神宮寺家となつてゐる。實際、大日本帝国時代は華族で爵位は公爵だつた。そんな一応由緒ある出の私だが、今回の目的は兵藤一誠の殺害阻止だ。コレによる原作がどう改編されるかを私は見たい。既に原作介入のために私の家にアザゼルを連れ^{拉致して}きてくれる。

「さて、ここからどう変わるのやら…。見物ですねえ」

そう呟きながら夕日を見ていた。

「数日後」

この数日でリアス・グレモリーが無能である事は証明されたのは良いとして校内では面白い噂が流れている。それは『兵藤一誠が他校の美少女に告白された』だ。その噂を広めたのはもちろん私だ。だつて面白そうだつたから、後悔はしていない。

「確かに今日だつたな…。よし、ならばランサーと行くか。アイツなら良い楯…じやなくて敵の攻撃を防げるだろう」

結局意味は同じな気がするが気にしてはいけない。気にしては負けだ。私はある程度考えをまとめた後教師としての職務を全うした。

「夕方」

「ランサー準備は良いな？あの墮天使が攻撃に移ろうとした瞬間それを妨害する」「おうよ、今回はバ^{清姫}ーサーカーが居ないから俺は死なないからな役に立つてやるよ」

そう言つて自信満々にサムズアップするランサー。ドンマイ：君は今から死ぬ。
れんだ目でランサーを見ていること数分、事態は動き出した。

「死んでくれないかな」

「ツ！ 今だ！」

「おう！」

ランサーが返事をし、飛び出そうとした瞬間私はその足を掴んだ。

「ん？ マスター？ 俺は今物凄く嫌な予感がするんだが」

「そうか、だが安心しろ。……………骨は拾つてやる」

「え、ちよ、それって」

えちよそれつて
「避け！回転して突撃する蒼き槍兵！！！」

私はランサーを思いつ切り投げた。
回転を付け、私の魔力を付与して投げた。ラン

サーはそのまま高速回転をし、堕天使にぶつかつた。

——ランサー——
君の犠牲は無駄にはしない

私はそう言うと同時にランサー（仮死）を素早く回収。何処かへ飛んでいつた堕天使

は連れてきているアザゼルに任せる。そして時を見計らつた様に赤い魔法陣が現れる。
「リアス・グレモリーか…。さつさと退散するか…」

私は転移しその場を後にした。

「後日」

結局兵藤一誠は悪魔になつていた。あの兵藤一誠の事だ、リアス・グレモリーの甘言に墮ちたのだろう。欲望に素直なことだ。

その日はいつも通りだつた。強いて言えば最近私の家族である仔猫に対するのグレモリーの勧誘がうざつたらしくなつてきただけである。

：近々一度止めに入ろうか…。もちろん、ローズ・ベリアルとして。

そんな事を考えながらその日は過ぎていつた。

そしてその日の夜になつた。

私が懶々見逃して泳がせたはぐれ悪魔をグレモリー眷属達が討伐するようだ。私はそれを陰ながら見守ることにした。なあに、すぐに介入しますよ。

こんかい放置したはぐれ悪魔は力に溺れた典型的なはぐれ悪魔だ。力は中級悪魔の上の中程度。しかし、油断すれば負ける可能性は有る。それ程グレモリー眷属はAUO

の様に慢心しているのだから。

「あらあら、うふふふ、以外にタフですわね」

「グギギギ…。小娘が…！」

現に慢心してゆっくりと痛め付けていた姫島にはぐれ悪魔が襲いかかつた。姫島ははぐれ悪魔の行動が予想外だつたのかその場を動こうとしない。

「慢心するとは…。実力が伴つてない場合は致命的だ…」

その言葉と同時にはぐれ悪魔は陰の中に消えた。いや、正確に言うと陰から生えてきた白い腕につかまれ呑まれた。

「御馳走様。たいした寿命でも無かつたね。まあ、これだけあればある程度は出来るだろうけど」

「誰!？」

私の言葉にグレモリーが反応した。周りに居る眷属達も臨戦態勢に入つていて。グレモリーは置いといて周りに居る眷属達に一言。

「君たちは何を慢心している? 君達程度の実力の者は悪魔に大勢居る。圧倒的力を持つているのならば慢心を認めよう。しかし、実力の伴わない慢心はただの傲慢だ。それを努々忘れるな」

私はその言葉と同時にその場から消えた。まあ、種はガンダムSEEDのブリツツで

33 原作介入 教師はままならない（教師要素殆ど無し）

お馴染みのミラー・ジユコロイドを使つただけなんだがね。

原作介入 堕天使は馬鹿しか居ないのだろうか

今日はローズ・ベリアルとしてサーベクスの元に来ていた。

「そうだ、グレイフィア。私の所のアーチャーから胃薬だ。この前言つていただろう?」
「ありがとうございます。ローズ様、出来れば胃痛そのものが無くなれば良いのですが

⋮

「はは⋮。それは無理だろう。なにせ、サーベクスだからな」

私が今回来たのは最近どうもきな臭い堕天使の下つ端達の動向について悪魔の方の対処について聞きに来たのだ。

「駒王町にて墮天使の反応を確認した。それに対する悪魔の行動方針を聞きたい」「それについてなんだね。そうだね、現地悪魔に一任するよ。ただし、状況を見て僕たちも介入しよう」

「そうか。ならば良い。それと私からの報告だ。今回の件には赤龍帝が関わっている」

私がそれを言うとサーベクスは座っていた椅子から飛び起き私に詰め寄った。が、数歩進んだところで止められた。

「これ以上は御主人様に近づけられません」

「ありがとう、咲夜。まあ、赤龍帝は今代は現時点では最弱だ、そこまで問題は起こらないと思う」

「そうかい…」

そう言つてサー・ゼクスは椅子に座り直した。そして落ち着きを取り戻したのか、一度深呼吸をした後テーブルに置いてあつた紅茶を一口飲んだ。

「さて、取り乱して済まない。私としては君に対応して頂きたいけど、駄目だよね？」
「当たり前だ。私はあくまでも暇を潰すためにこの地位を手に入れたんだ。わざわざ戦うことなどしない。まあ、面白そ�だつたら別だけど」

私はそれだけ言うとスキマを開いて帰つた。明日も普通に学校はあるのだ。私はスキマの中に咲夜が入つたのを確認するとスキマを閉じた。

（翌日正午）

「今日はここまでにする。宿題は明日提出。提出できなかつた者にはグラウンドを十km走つて貰う。走りたくなければ宿題は提出するよう」

『『『はい！』』』

教室内に居る生徒全員の息の合つた返事を見た後私は教材を片付けていると…。

「神宮寺さん！弁当忘れてましたよ」

「ああ、咲夜か。済まない、それで何処に忘れていた？」

「玄関に置いてありましたよ。全く、普段は完璧ですが何故時折抜けているんですか」「はは…。返す言葉も無い」

私と咲夜の会話を聞いている間、教室は静寂に包まれた。まあ、分からなくも無い。咲夜は控えめに言つても美少女だ。すらりとした足、華奢だが必要な筋肉が付いているであろう腕、健康的な肌、そして目を奪われる白銀の髪、そして真っ赤な目。それらが合わさつて幻想的な美少女を形成している。つて、誰に向かつて解説しているのだろう。

私と咲夜の会話を聞いて教室内は啞然としていた。そして暫く黙つた後それは決壊した。

「先生の裏切り者おおおおおおおおおお!!!!」
「美男美女つて反則…」
「!!!!」

「クソッ！先生は敵だったのか！」

「やっぱり先生はリア充か…！そんな気してたぜ！」

「貴様等静かにしろ！」

阿鼻叫喚、混沌としていた教室内は私の言葉一つで静かになつた。

「はあ、とりあえず咲夜ありがとう。お礼は帰つてからする」

「はい。では、私は渡しに来ただけですので」

「ああ」

そう言つて咲夜は帰つて行つた。その後私は生徒達からの質問されることを考慮してその場からさつさと撤退した。後に残つたのは混沌とした教室だけだつた。

混沌は私の専売特許なんだがねえ。

あ、墮天使イベント介入しなくちや。その時は彼女たちを連れて行こう。最近ストレス溜まつてゐるようだし。

確か今日の夜だつたか？まあ、放課後さつさと帰つて彼女たちを引き連れて行けば間に合うか。

「そんな訳で墮天使殺し行つてみよ～！」

「「おー！」」

ノリノリの吸血姉妹とそのメイド。なんだろう。そんなに体動かしたかつたのか？確かに最近詰めっぱなしだつたけど。

「ん～？クソ悪魔じやなくて人間がなんの様なんですかね～？」

「そう言う君は神父で間違いないか？」

そこに居たのはフリード・セルゼン。原作でもキチガイ外道神父だつた奴だ。此奴よりあの麻婆外道神父の方が可愛く見える。まあ、あつちは愉悦するけど。

「そだとしてなんですか～？まさか、ボクチンに一目惚れ？ごめんね～、ボクチンまだ

身を固める気は無いんだ~」

「はあ、何処かのバーサーカー並に意思疎通が出来ないな。咲夜、この神父は任せた」

「はい」

「ん~?まさか、お嬢さんがボクチンの相手?綺麗な女の子が相手なんて運が良い!」

そう言つておどけるフリード・セルゼン。それを見て咲夜は目に嫌悪を浮かべる。

「さつさと終わらせます」

「そう簡単には行かせませんよっと!」

教会の中でメイドと神父の戦いが切られた。

所変わつて教会地下。そこでは神宮寺帝（カオス）とレミリア・スカーレットとその妹、フランドール・スカーレット。そして彼らと対峙する堕天使レイナーレ、ミツテルト、カラワーナ、ドーナシーケ。

「たかが人間風情が良くここまで来れたわね」

「私がただの人間に見えるのなら貴様は下級堕天使なんだよ」

「お兄様を馬鹿にするんだから壊れても良いよね?」

「貴方たちの運命は見なくても分かるわ。此所で死ぬ」

私たちの言葉に堕天使達は笑つた。

「ただの人間に何が出来るというの?人間なんて私達至高の堕天使に銅われる家畜で

しよう?」

私はその傲慢な物言いに少し眉がピクリと動く。ああ、会話は不要だ。必要なのは虐殺。戦闘ではなく圧倒的な武力を前にした絶望を叩き付け苦しませながら殺すこと。

それと同時に私は両目にギアスをだす。

「世界の根源力オスが命じる。意識を持つたまま死ね、ゆっくりと自らの首にナイフを突き立てる」

その言葉を発しながら目の前の堕天使共を見つめる。すると堕天使共の目から光が消えた。

「イエス、マイロード」

その言葉とは裏腹に顔は絶望で彩られ涙すら流している。しかし、体は制御が効かず手に光で出来たナイフを生成し首にジリジリと近づけて行く。

「い、嫌!ま、まだ死にたくない!」

「クッ!人間、私に何をしたあ!?」

「何でっすか!?なんで勝手に体が動くんすか!?」

「貴様等に種明かしするわけがなかろう。そのまま絶望の中で死ね」

そう言いながら私が笑っていると服の裾を引っ張られた。何かとそちらを見るとそこにはふくれつ面のフランが居た。そしてその横にはやはり不満そうなレミリアが居

た。

「どうした？」

「どうしたつて、私も彼奴ら壊したいー」

「最近から動かせてないんだから少しくらい動かせなさい」

つまり自分たちにも殺させろと言うことらしい。まあ、良いだろう。
「分かつた。殺すならゆつくりね。絶望して貰わないと」

「分かつた！」

「分かつたわ」

その言葉に墮天使達は絶望した。顔は穴という穴から様々な液体を出し懇願すらず、ただ早く死ねることを願うのみだった。

その顔を見ながら私は一人嗤っていた。

「数時間後」

墮天使はレイナーレを除いて全員が死んだ。男性は尊厳を切り取られ、思いつく限りの拷問方法で殺され、女性も尊厳を踏み躡られ無残に死んでいった。

「さて、墮天使レイナーレ君が最後に残った。さあ、喜べ。君は私自ら殺す」

その言葉と同時に私は背中から第15使徒アラエルの羽を生やしレイナーレに向かって精神攻撃をする。最初は目がヤバ目になつてきただけだったが時が経つにすれば

レイナーレはどんどん変容していく。最後はただの植物のように動かなくなつた。
それと同時に。

「アアアアアアアシニアアアアアアアアアアアアアア!!!」

その言葉と同時に私達の居る場所に兵藤一誠が入つてくる。そしてその後に続くグ
レモリー眷属。どうやら時間を掛けすぎたらしい。私は植物状態のレイナーレを陰の
中に入れるとその場から退散した。グレモリー眷属達が何か言つていたが気にせず
帰つた。

まだ正体は明かさない。面白くない。明かすならコカビエル戦でだ。

慢心は家の姫の特権である。まあ、最近してない気がするけどね：

廃教会から逃げ出しそのまま家で赤いお母さん手製の夕飯を食べ寝た。赤いお母さんは主に和食を作るが私は洋食派だ。まあ、流石に我儘は言えないので時折自分で作っている。それは置いといつてついこの前だつたか、シスコン魔王♂の親と慢心焼き鳥の親が酒が入つた勢いで慢心焼き鳥と傲慢娘の婚約^{結婚}を決めたらしい。この前シスコン魔王♂に会つたとき聞かされた。

私はそんな話聞く気は無かつたのだがねえ…。

そして姫ギルから貰つてきた（何故か宝物庫の中にあつたらしい）胃薬をグレイフィアに渡し、私はその場を後にした。

「これでホームルームを終わる。日直、号令」

「はい、起立！礼」

「ありがとうございましたー！」

生徒が全員いそいそと着たく準備をする中、私も片付けを始めた。
そしてある程度片付いたところである人物が来た。

「神宮司先生はいらっしゃいますか？」

「どうした？ 木場、何か様か？」

「はい、先生。僕と一緒に来てくませんか？」

…。コレは旧校舎に呼ばれるパトーンだ。あそこには白音が居るが、絶対に私の正体について喋らないように言っているので白音では無いことは確か。つまり、偽装した出世に関する事でか？ まあ、良い。いざとなれば全力で逃げる。そして、変装して口封じすれば良い。

「分かった。だが、一度職員室に寄らせてくれ。道具を一度置いておきたい」

そう言つて私は手に持つた授業道具を見せる。それに対し木場は柔やかに頷き「いいですよ」と答えた。

それを見ていた一部腐女子が興奮していたとかしてないとか。ただ、私が睨むとあさつての方向を向いて口笛を吹いていた。おい、一部。吹けてない。空気を吐き出してるだけになつてるぞ。

そうして一度職員室に寄り授業道具を片付け、私と木場は旧校舎にあるオカルト研究部に向かつた。ただ途中で一度影に拉致られかけたのは完全な余談である。

「付きました」

「此所はオカルト研究部だったか？……………そう言えば木場は此所所属か」

「ええ、それで部長に案内してくるよう頼まれまして」

私は白々しく驚いたように言うと、木場は気付いてないのか木場が来た理由を言った。それに対しポーズとして少し非難する。

「そういう事は部長がるべきだろう？グレモリーは何をしている？」

「あはは…………。部長は今日予定が入つてしまつて。その処理をしているようで

…」

「まあ、今日は見逃すが次は無いぞ？」

「……………はい」

なんだその間は。またこの方法で呼び出す氣か？ そうなつた場合私は君たちに向かつて誠心誠意、真心込めて次元の彼方に吹き飛ばしてやろう。

そう意気込みながら部室内に入つた。そこはいかにもオカルト！ 見たいな内装だつた。壁の至る所に書かれている魔方陣。まあ、どれも形だけで発動すらしないものだが。

内装を見ていると奥の方から二人の女子生徒が出てきた。

「先生、お茶です」

「ん、姫島か。紅茶はありがたい。少し喉が渴いていてな」「いえいえ」

そう言つて私は姫島から貰つた紅茶を一口飲む。…………アールグレイか。私としてはダージリンが好きなんだが：客の身でそんな事は言えんな。後で赤いお母さんにいれて貰うか。

そんな事を考えているとグレモリーが話し始めた。

「今日は来て頂きありがとうございます。神宮司先生」

「ああ、生徒に呼ばれたら教師とは断れないものだ。それがどんな用件でもな」

暗に早く用件を言えと言つておく。コレに気付かなかつたら速攻で私は帰る。

流石のグレモリーも察したのか、顔を引き締めて話は始めた。

「今回先生に来て頂いたのは、私の眷属になつて頂くためです」

「ほお？ 眷属？」

まさかそう来たとは。面白い。ここからグレモリーがどうするか見物だな。

「はい、私達は悪魔。仔猫だけは違いますがそれ以外の全員が悪魔です」

「つまり、木場、姫島、兵藤、アルジエントは悪魔だと？」

「はい」

「それで、何故私を眷属にしようなどと考えた？」

そこ重要。私を眷属にした理由が神だから（バレてない）とか男の娘だから（見た目はスカサハだから）とかだつた場合は全力で断る。傲慢にも程があるとね。いや、後半

は普通にコレも断る。何が楽しくて男の娘だからって眷属に入れられなければならぬ。

「それは、神宮司先生がかつて：平安時代から大きな影響力を持つている神宮司家の者だからです」

「それだけか？」

「いえ、他にも先生は魔術師ですね？それが理由です。この時代、人間の魔術師は少ない。でしたら私の方で保護しようかと」

成る程、確かに私の姓である神宮寺は原作介入するためだけに懃々平安時代から作り上げた家だ。ハイ、そこ。無駄な行動力とか言わない。私も自覚している。

それにしても保護？これまた大きくてたものだ。私はこれでも（設定上）二十年以上独り（使い魔とか鯖は除く）で生きていた。それをいきなり現れ保護？あげくに人をコレクションみたいに言いよつてからに。私を馬鹿にしているのか？

コレにはソファーレに座っていた白音もグレモリーに対して白い目を向けていた。

「馬鹿にするのは止せ。私は小娘に守られるほど弱いつもりは無い」

「ですが、私達が悪魔であるように他に堕天使や天使果てには神も居ます。それに最近はこの近辺で堕天使を殺害した謎の人物が確認されていますし、先生お一人では…」「誰が一人と言つた？私は一人では無い」

その言葉と同時に私の座っている椅子の横に魔方陣が浮かび上がった。そしてそこから出てくるのはグレー髪に黄金の目を持つ美少女だった。ただ、無我夢中で特大サイズのおにぎりを頬張っているので若干台無しである。

「おい」

「モグモグモグモグモグモグ」

「……………おい」

「モグモグモグモグモグモグ……………はい、なんでしょう？」

特大サイズのおにぎりを一瞬で食べきつた美少女は私に向き直り笑顔で聞いてきた。それに対し私は笑顔で頭に手を置き、3割でアイアンクローをした。

「痛いです。痛いですって主様！流石の龍でも頭が爆散しますって！だからお願ひします！」

「断る。貴様には一度体に教えてやらないといけないようだからな」

「体に教えるつて……………主様大胆……………（ポツ）」

「……………」

「ああ！無言で力強めるのやめて！死ぬ！ティアマトさん死んじやう！割とマジで！」

「「「ティアマト！？！」」

私と使い魔テアマトアマトの茶番に何故か驚くグレモリー眷属。まあ、原因は分かつてい

るよ？私の使い魔がティアマトだからでしょう？はいそこ、グレモリー。取らぬ狸の皮算用しない。私はお前が嫌いだから。傲慢で慢心とか大嫌いだから。え？姫ギル？慢心してたからO H A N A S H Iして慢心しなくなつたよ？内容？聞かないでくれ。あの時は私でもおかしいと思いながらやつてたんだ。思い出したくない。

グレモリーが少し落ち着いたのか聞いてきた。

「せ、先生。あの、その女性はあのティアマトなんですか？」

「そうだ。此奴は私の使い魔であるティアマト。まあ、ただ団体の大きいトカゲに過ぎん」

「女性に対してそれは無いと思いますよ～主様～」「(ギロツ)」ア、ナンデモナイデス」余計なことを言つたティアマトを睨んで黙らせる。私はそれにと付け加える。

同時に私の背後に黄金の粒子が集まつてゆく。

「私には精銳の仲間が居る」

「うむ！万事任せるが良い！」

「まさか僕が呼び出されるとはね。まあ、彼女もいるから問題は無いけど」

「この天才美女ダヴィンチちゃんにお任せあれ！」

「うん？まあボクは君のサーヴアントだし？頑張るよ？」

何処かのセイバー絶対殺すウーマンが見たら殺しにかかりそうな赤の男装の麗人。

49 慢心は家の姫の特権である。まあ、最近してない気がするけどね…

性別がどちらなのか全く分からぬ縁の髪を靡かせる青年？少女？自らを天才美女と豪語する片手にゴツイ籠手を付けた女性。そしてこれまた性別がどつちなのか分かりかねる見た目をした青年？少女？の四人がその場に現れた。

やせいのライザーがあらわれた！オリ主は威圧した！

「先生、彼らは？」

「紹介しよう。私の最精銳。そこのティアマトより役に立ち、私と同等の能力を有している英雄達だ。真名は明かさんぞ。貴様等に言う気は無いからな。分かつたか、ライダー」

「うーん、まあ、分かつたよマスター」

性蒸発は伊達じや無い！

そう言つて笑顔を見せるライダー、アストルフォ。何故だろう、不安で堪らない。理

そのまま膠着状態が続き、お互いにらみ合っていると後ろの方から魔力反応を感じた。
!!?

「愛しのリアス、
会いに来たぜえええ
?!?」

出て来た三男坊がこつちを見て驚きのあまりに顎が生物が開いてはいけない角度まで開いてしまっている。

「む、貴様は確かフエニツクスの三男坊か（大体貴様とは10年ぶりか、フエニツクス卿は元気か？）」

「あ、はい。お久しぶりです、神宮寺殿（ええ、近々家にいらつしやつて下さい。父も貴方と話したがつていました）」

三男坊はそのまま何処に座れば良いのか分かつていなかつたようで、とりあえず私の横に座らせた。英靈達には靈体化して貰いました。アストルフオ辺りは家に帰つてゐるかも、若干馬鹿の子状態だし。

私と三男坊の挨拶に驚いたのかグレモリーが聞いてくる。

「先生はライザーとお知り合いで？」

「ああ、此奴とは親の知り合いでね。まだ此奴が小さい頃は遊んでやつたさ。そう言えばレイヴエルにコレを渡してやれ。私と彼奴共同で作つた和洋の菓子だ。一応人数分有るから分けて食べろよ」

「あ、ありがとうございます。と言いたいんですが流石に多すぎませんか？私一人では持つて帰れませんし。皆、来てくれ」

三男坊に渡したのは人一人では持ちきれない、抱えきれない程の大きさの菓子箱だった。悪魔なら大丈夫だとたかを括つていたが流石に無理か。

そして三男坊、ここからは面倒なのでライザーと呼ぼう。ライザーの言葉と同時にライザーの背後に複数の魔方陣が浮かび、其処から美女美少女が現れた。

「神宮司様お久しうぶりです。先週はどうも」

「あー、お菓子だー！ライザー様食べて良い？」

「それはレイヴエル殿への事らしいのですが…。レイヴエル殿いかがなされます？」

「そうね、皆で食べましょう。それにこんな量を私一人では食べれないわ。おじさま、頼みましたけどこの量は？」

そう言つてジト目で見てくるレイヴエル。ううん、気まずい。ココは正直に話そう。「いや、なに。私も彼奴も少し張り切つてしまつてな。途中で作りすぎに気が付いたんだが他の眷属達にも上げれば良いという結論に至つた訳だ」

「はあ、なんとなく予想してましたわ。まあ、ありがたいのですが」

「なあ、レイヴエル、それにユーベルーナ。私はそんな話聞いてないぞ？いつの間にあつたんだ？先週？」

「ライザー様は少し黙つて下さい。それか、紅髪の滅殺姫との婚約の件を早く進めて下さい」

「ア、ハイ」

見事に尻に敷かれているライザー。今度一緒に呑みに行くか？それくらい私が奢るから。そんなメシアを見たみたいな顔しないで。なんかいたたまれなくなるから。強く生きるんだ！

「んん！それで、俺とリアスの婚約の件だが…」

۲۷

ライザーが話を切り出した瞬間兵藤が叫び、また話をぶつた切つた。コレには流石のライザーもキレる寸前！耐えるんだライザー？彼奴はそう言う生物だから。

額に青筋をピクピクさせながらライザーはグレモリーに婚約についての話をした。グレモリーはそれを堂々と拒否。貴族として政略結婚は当たり前だ。むしろ、相手を尻に敷くくらいの気概が無ければ。

結果、婚約はレーティングゲームで決める事になつたらしい。何故らしいと付けたか？途中から頭に響く赤い弓兵なお母さんからの悲鳴で入りませんでした。一応その場を取り繕つたから私が上の空だつたのに気付いた奴は居ないと思う。

さて、この後はライザーと酒を飲み交わす約束がある。こうなつてしまつたからにはライザーも腹を括るだろうし、少しくらい愚痴に付き合つてあげますか。

その後、フェニックス家で号泣しながらワインを飲むライザーと若干引き気味な神宮

寺が目撃されたとか、されなかつたとか。

レーティングゲーム観戦

今回サーベクスに誘われ私達はレーティングゲームを観戦することになった。

ついでに連絡があつたのでグレイフィアに胃薬を届けるのも目的の内だ。つて言うか、グレイフィアの胃がマツハになつてるつぱいんだけど、どうしよう。『神宮寺相談所』みたいな作れば良い？ 場所は聖杯の中？

「この戦い、ベリアル卿はどうちが勝つと思う？」

「ふむ、考える余地無しでフエニックスだ。第一、グレモリーは十日間しか特訓とやらをやつていない。その上その特訓も普段の基礎練習と殆ど変わらないらしいではないか。魔王であるサーベクスも分つているだろう？」

そう言うとサーベクスは苦虫を噛み潰したような顔をした。いや、当たり前だろう？ それに私は原作を知つてゐるんだ。それによれば負けたにも関わらず何の代償も無く、フエニックスとグレモリー両方の家名に泥を塗るような行為をしたそうだ。コレは先に釘を打つておかなければならないかもしない。

「サーベクス、先に言つておくがこの戦いでもしグレモリーが負けた際、赤龍帝を結婚式に呼び出し『余興』としてフエニックスと戦わせフエニックスが負けた際は結婚話を無

かつたことにするなどはしてくれるなよ？ ただせさえ反乱分子が多いこのご時世なのだ、身内に甘くなどなつていればそれをダシにされて失脚や反乱が起ころるぞ」

「やけに具体的だね…………。ま、まあ、その忠告は心にとどめておくよ」

いや、留めているだけじゃ駄目なんだけど…………。もう少し忠告して区かな？

「サー・ゼクス、もしそんな事をすれば義理とは言え娘であるグレイフィアを拉致して叛旗を翻すよ？」

「やめて下さい死んでしまいます。…………分つた。身内蟲廻はしないよ、ベリアル卿に叛旗を翻されたら魔王では止められないからね」

そう言つて冷や汗を流しながら苦笑いをするサー・ゼクス。背後では何故か泣いているグレイフィア。いや、義父として当たり前だよ？ おつと、分らない読者に説明してあげよう（物凄くメタい）

さて、何故グレイフィアが私の義娘なのか。それは私が原作介入したからだ。そもそも、敵勢力の幹部に当たるルキフグス姓を名のつていると旧勢力である旧魔王派の格好の的だ。私も個人的にグレイフィアは好印象なので不幸になつて欲しくない。そこで私は旧魔王派からグレイフィアが離叛したところを見計らい、保護。そして養子にしてサー・ゼクスに送つたのだ。

まあ、本来とは道筋は違うが見事サー・ゼクスとグレイフィアは目出度く結ばれ、子供

も生まれた。ただ、魔王であるサーゼクスが公私混合が多いのでグレイフィアの胃がマツハになつてしまつてゐるらしい。まあ、頑張つてくれ新婚さん。

そんな訳でグレイフィアはグレイフィア・ルキフグスでは無くグレイフィア・ベリアルとなつてゐる。副次的に私も魔王派でかなりの権力を持つたのだが……。御陰で「家の子を嫁に！」って言つてくる貴族が多い。正直、消し飛ばしたいくらいうざい。

そうしてゐる内にフェニックスとグレモリーの王対決が起きた。グレモリーは誰がなんと言おうと慢心しているように見える。対してフェニックスは今だ能力頼りな部分があるがそれを技術で補おうとしている部分がある。

これは勝負あつたな。

私は席を立ち、そのまま貴賓室を出ようとした。すると、サーゼクスが事前に用意していたのか私にある紙を渡してきた。

「これは？」

「コレはリーアたんの結婚式の招待状さ。お義父さん」

「はつ、サーゼクスにお義父さんと呼ばれると違和感があるな。私はまだ結婚して居ないから余計にな」

そう笑つて私はその場を後にした。